



● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

2018年度も「いのちの教育」をテーマに連続講座を開催いたしました。全5回の講座のうち、第3回は学外より寺西伊久夫氏（社会福祉法人愛知育児院理事長）をお招きし、「いのちの輝きを求めて～社会福祉と私～」と題する貴重なお話をうかがいました。その他の4回について、今号で要旨を紹介いたします。ご味読ください。

INDEX

人生100年時代～最後まで自宅で過ごすために～	1
古代エジプト人の来世観	2
発達課題(ライフタスク)と人生	3
死を見つめて～壊れる身体～	4

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

2019.3.31 NO.49

人生100年時代

～最期まで自宅で過ごすために～

鈴木 淳子

人生100年時代とは、英国のリンダ・グラットン氏が長寿時代の生き方を説いた著「LIFE・SHIFT（ライフシフト）」で提言した言葉です。「教育」「多様な働き方」「無形資産」の重要性が増すとされています。わが国の総人口は、平成29年10月1日現在1億2671万人となっており、高齢者人口（65歳以上人口）は3,515万人です。高齢化率27.7%となっており、100歳以上人口は69785人です。（平成30年9月14日厚生労働省）100歳の誕生日をむかえるには、健康が一番大切です。

健康寿命と言う言葉もよく聞かれます。日常的に介護を必要とせず、自立した生活ができる生存期間のことです。2016年度は、日本人男性72.14歳女性74.79歳となっています。（2018年3月厚生労働省）健康寿命の延伸は、わが国の課題のひとつとなっています。高齢者の死因に多いもの

には、誤嚥性肺炎があります。誤嚥性肺炎の予防は嚥下機能の低下を防ぐことです。嚥下（飲み込み）も筋肉を必要とするため「サルコペニア（筋肉量の低下）」が課題です。加齢に起因する症状のため薬では治すことは困難です。

他にも、「ロコモティブシンドローム（運動器症候群）」や「フレイル（虚弱）」も同様です。「フレイル（虚弱）」には 移動能力、認知機能、栄養状態日常生活の活動性、疲労感など広範な要素が含まれます。「フレイル」の原因は、誕生日が来ること・人が歳をとることであり、医学は無力です。最期を迎えるのは病院や施設が多く、自宅で死にたいという思い通りにはいかないのが現実かもしれません。平成もまもなく幕を閉じます。次の時代が安心して暮らしていけるような世の中であることを願っています。

（本学 社会福祉学部 特任講師）

古代エジプト人の来世観

古川 桂

沈んだ太陽が昇る、欠けた月が満ちる、増水したナイル川の水が引き大地に植物が芽生える。古代エジプト人はこのように永遠に繰り返す自然のサイクルから、再生・復活の思想を持つようになった。人間にとって死は、来世に復活するための過程であり、復活した後、来世では永遠の生が得られると考えた。

しかし、無条件で復活し、永遠の生を得られるわけではない。復活に必要なアイテムとして肉体が必要なのである。そこで古代エジプト人はその肉体を残す方法を遺体に施した。それがミイラである。

ミイラになり、葬儀を終えた死者の復活への道は、ここからが本番である。死者は死後の地下世界を進むが、その道には炎の門をはじめとする多くの障害と様々な魔物が待っている。死者は呪文を唱えてそれらを次々と乗り越え、撃退していく。まるで現代のゲームに出てくる勇者さながらである。そして、最後に冥界の王オシリス神の前で「最後の審判」を

受け、主張が正しいと判断されると復活が許されて、晴れてゴールである来世の「イアルの野」に辿り着くのである。

だが、復活を喜ぶのもつかの間、「イアルの野」では不病・不死が得られるものの、なんと農業労働の義務が課される。なんとかそれを避けたい古代エジプト人は「ウシャブティ」という人形を埋葬し、毎日1体ずつ送り出して自らの代わりに働かせ、労働の義務を逃れたのである。

こうしてみると、実は古代エジプト人の来世は必ずしもパラダイスではなかったようである。しかしそれをパラダイスになるようにあの手この手を考えた古代エジプト人の思考のユニークさ、そして死への恐怖を乗り越えようとする前向きな思考に、現代に生きる我々は惹かれるのかもしれない。

(本学 文学部人文学科 専任講師)

発達課題(ライフタスク)と人生

石牧 良浩

アメリカの心理学者・精神分析学者エリク・エリクソンは、心理社会的発達理論という考え方を提唱している。彼の考え方は、人の一生を8段階に分け、それぞれの段階での「発達課題」という概念を設定し、それらへの取り組み方や達成の有無で人生の充実度や人格の発達・成熟を見ていく、というものである。彼が提唱した乳児期の発達課題は周囲の大人に対して信頼感・安心感を持つこと、幼児前期・幼児後期の発達課題は自分の周囲の環境に積極的に働きかけていくこと、児童期の発達課題は努力して何かを身につける喜び(勤勉性)を学ぶこと、青年期の発達課題は自分の生き方(アイデンティティ)を定めること、成人期の発達課題は人を愛すること(親密性)、成人後期の発達課題は後進を育てること(生殖性)、そして老年期の発達課題は、自らの生きてきた人生を肯定すること(統合性)である。

どこかで発達課題を残してしまうと、将来より大きな危機を迎えることになる。例えば、青年期の発達課題を身につけ

損ねて成人期を迎えた場合、「自らの生き方に関する確信」という大切なピースが欠けたまま、成人としての振る舞いが求められることになるのである。

命は、いつか終焉を迎える。そのときに、結果はどうあれ、これまでの発達課題に対して一生懸命取り組んできた人は、死を前にしても後悔・絶望することなく、自らの人生を肯定できる。逆に、発達課題にしっかりと取り組んでこなかった人は、死を意識したときに自分の人生が空虚だったことに気付き、人生に絶望し、ただ「生きる」ことにしがみつくのではないだろうか。「生きること」と「死ぬこと」は密接に関連している。

死の瞬間に後悔せず、胸を張っていたいと思う。そのために、やるべきことを先延ばしにしないように、目の前の課題から逃げないように、その時々で労力を出し惜しみしないように、自分なりに精一杯生きる姿勢が求められるのではないかと感じている。

(本学 社会福祉学部社会福祉学科 准教授)

死を見つめて—壊れる身体—

蒲池 勢至

死とは何か、死ぬということはどういうことか。寺の仕事をして40年余りしてきて、多くの死の現場に立ち合ってきた。しかし、どうしても分からない。私事であるが妻の死を看取り、死にゆく姿を傍らで見続けねばならなかった。ここから改めて考えてみたい。

妻は病気ばかりの人生で、12年前、突発性水頭症になって手術、動けなくなって自宅で全介助生活を送っていた。6年前、最後は大腸癌と肝臓癌になってしまった。4回目の名古屋大学付属病院に入院、医師とのやりとりから手術の断念、そして名古屋掖済会病院の緩和ケア病棟に転院して最後の妻との時間を過ごした。水頭症になってから、妻はほとんど言葉を発することができなくなった。動くこともできず言葉もなくなったので、私が病室に泊まり込んで付き添った。これまでの入院でもそうしていた。緩和ケア病棟は「静かに死なせる」ための場所である。もう回復する希望はまったくない。入院していても、これはこれで辛いもの

であった。その中、妻の病状を1日々々ずっと記録し続けた。何かのためではない。そうせずには不安で仕方がなかったからである。いま、どんな状況にあるのか、傍らに居ても分からない。「あと1週間の命」と宣告、栄養も800kcalから最低限の200kcalになり、血尿が出て、毛細血管も壊れて死斑が出だした。死の前日、血中酸素は83、両足は水分排出ができなくて浮腫む。当日朝、目に黄疸が出て、危篤というよりもっと厳しい状態という。午後、身体が冷たくなり、尿も出なくなって体温は35.6度になった。痛み止めのフェントス・テープ1mg3枚のおかげで苦痛は感じていない様子。「息吸うんだよ」と声を掛ける。「死の圧迫感」を感じた。そして、静かに往った。

最後の行き着く地点がここであった。身体は壊れていく、実感である。そして、死者はどこへゆくのか、残された生者の課題となった。

(本学 文学部仏教学科 特任教授)

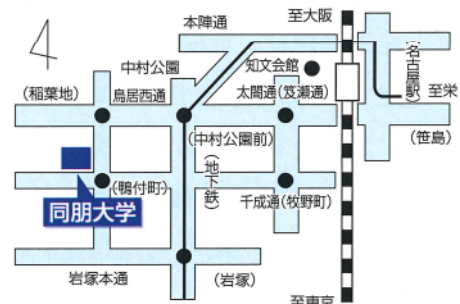
所 員

- センター主幹：安藤 弥 (文学部 教授)
所 員：木野美恵子 (社会福祉学部 教授)
所 員：森村森鳳(張偉) (文学部 准教授)
所 員：石牧 良浩 (社会福祉学部 准教授)
所 員：市野 智行 (文学部 専任講師)

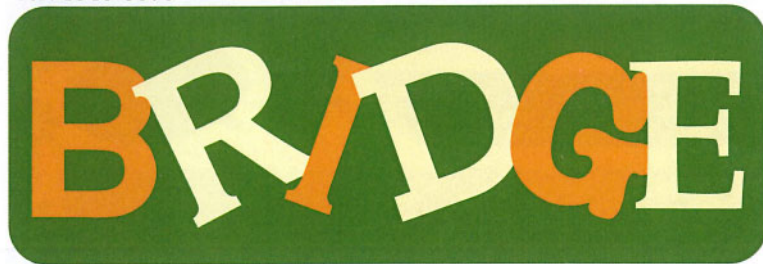
お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス／栄又は笹島より②系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄／中村公園より⑬系統稲西車庫行、鴨付町下車



巻頭エッセイ	1
シリーズ「福祉にみる“いのち”」②	2
コラム「人間を考える」⑥	3
2019年度講座案内	4

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市千区稲葉地町7-1
TEL 052-411-1373
Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

昨年度末で定年退職の木野美恵子教授が所員を退任し、新たに岩瀬真寿美准教授が所員に就任しました。センターは今年度も、連続講座（全5回）の開催と BRIDGE（年2回）の刊行を中心に活動してまいります。今号は学長より巻頭言をいただきました。各シリーズも毎回のいのちをめぐる問題提起をいただいています。ぜひお読みください。

2019.7.1 No.50

人間の尊厳と命の大切さ

松田 正久

教育の役割とは、何だろうか？私も、教育界に長年、身を置いてきた者として、この問題は、常に頭のどこかにあるのである。「教育とは人間の尊さを打ち立てること」と、宗像誠也（1902-1970）は「私の教育宣言」（1958年、岩波新書）で述べている。60年前の本であるが、この「人間の尊厳の確立」が教育の本質を表しているとは私は今でも考えている。この「人間の尊厳」は、世界人権宣言（1948）にも日本国憲法（1948）にも謳われている。前者は30条からなり、人間の尊厳とは何か明確に語られている。すべての人は同等の権利を持って生まれ、すべての人は自由でなくてはならないし、安心して生きる権利を持っていること、一人ひとりのいのちが大切に守られなければならないことが明瞭に語られている。特に第26条2項では、「教育は、人格の完全な発展並びに人権及び基本的自由の尊重の強化を目的としなければならない。」と、その目的について書かれている。我が国の憲法でも「第三章国民の権利と義務」

（第10条～第40条）で、同じ概念が規定してある。そして第99条は国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員の憲法尊重・擁護義務を定めているように、憲法は為政者を拘束する役割を持っている。

私たちは、この世界を成り立たせるための基本的原理について、考えることが重要である。人間の尊さについて考えることは、いのちについて考えることに繋がり、「宗教は、人間の尊さを打ち立てる限りにおいて価値がある」（前掲書）と述べているが、私も同感である。沖縄復帰47年の5月15日、玉城知事は、「『自立』、『共生』、『多様性』の理念のもと、全ての人の尊厳を守り、誰一人取り残すことのない社会を実現する」と決意を述べたことが報道されている。一人でも多くの教育者・宗教者が、人間の尊厳の確立に向けて、頑張ってくれることを期待しているし、私もその努力を続けていきたいと思う。

（本学 学長）

シリーズ 福祉にみる“いのち” ③②

“輝くいのち”を支える人に与えられた役割

高尾 淳子

二分脊椎という先天性奇形がある。二分脊椎の子どもは脊柱管が二分された状態で誕生する。それらの子どもの大半は発生部位により下肢の運動や知覚に麻痺が生じ、歩行や排尿、排便などの機能障がいを伴うため、導尿や洗腸などの医療的ケアを必要とする。医療的ケアとは、日常生活に必要な医療的生活援助を医療職ではない者が行なう行為のことである。

保育の世界では、医療的ケアを必要とする子どもたちに対して長く固く門を閉ざしてきた。しかし、すべての園が受け入れを拒んでいたわけではない。岡崎市にある竹の子幼稚園では、「医療的ケア児」や「インクルーシブ保育」等の用語が社会に広がる前から心身にケアが必要な子どもを受け入れ、他の子どもと共に育てるインクルーシブ保育に取り組んでこられた。

今から遡ること35年余、竹の子幼稚園は二分脊椎症の3歳児「のんちゃん」を迎えることとなった。同園は、他園から入園を断られ続けた親子が辿りついた日中活動の場であった。園長は、二分脊椎

児を初めて受け入れるにあたり、医療従事者を園に招き勉強会を開いた。園は親子通園を要求せず、医療的ケアは養護教諭が担当した。園長をはじめ全教職員が温かくきめ細やかな配慮を提供し、本児の3年間の幼稚園生活を支援した。後年に筆者が園長に、のんちゃんを園に迎えた理由を尋ねると、園長は「入園を断る理由がなかった」とお答えになった。その言葉の含蓄を、筆者は心に刻んでいる。

もとより人は、この世に役割をもって生まれてくる。のんちゃんもまた、大きな役割をもって生まれてきた。のんちゃんは昭和50年代に、医療的ケア児に我々教育者がどのように関わるべきかを問いかけてくれた。人は、単独で生きることが困難であるため集団を形成する。集団の中では各々に役割が与えられており、その役目を誠実に果たすことで真に社会で生きているといえよう。自分は天からどのような役割を与えられ生かされているのか、今一度、思いを馳せたい。

(本学 社会福祉学部社会福祉学科 講師)

コラム 「人間を考える」⑥

厄介者の人間

深町 悟

人間という種について思考しようとすれば、その比較対象として、動物が選ばれるのは当然である。というより、人間がいかなる存在かを理解するのに他の動物を無視することはできないだろう。しかし、人間と他の動物とを厳密に区別し、それを定説にまで高める試みは、意外だろうが、いつも失敗してきた。というのは、言語、思考能力など、人間を特徴づけるように思える能力においてさえ、それらを備えている動物との差を厳密に定義付けることが難しいからである。一方で、人間も動物の中に組み入れて考えることは驚くほど簡単である。ゆえに、分類学の父リンネの、「猿には犬歯と他の歯の間に隙間がある、という事実以外に、人間と猿とを区別する特徴を何一つ発見できない」、との言葉に賛同するものである。鷹の視力が優れているように、チーターの走る速度が速いように、狼が伴侶に枯れない愛情を持っているように、クジャクが美しいように、生き物にはそれぞれ優れたところがあり、それが人間にとっては言語の処理能力なのだろう。では、人間を多様な動物の一種とみなすことで、我々がいかなる生き物かを明らかにできないだろうか、と考えてみたが、見えてきたのは、人間は動物の仲間としてはどこまでも厄介者である、という胸の痛い事実ばかりである。

「住みよい街」、「快適な空間」、「安全な地域」、これらの聞き慣れた言葉は、当然、すべて人間にとって、という意味である。人間は価値のあるものを作ってきたが、それらは他の生物にとっての有用さをほとんど無視して出来たものである。いや、有用どころか、有害でさえあるだろう。文明が彼らに利するところはなく、人間社会が繁栄すればするほど、他の生物の生活、ひいては彼らの生存そのものが脅かされるようになる、というのはこれまでの、特に産業革命以降の歴史が語る通りである。動物たちの惨状について全く知らない人間などほとんどいない訳だが、それをどこか当然のこととして受け入れているのが我々現代人の大半だろう。私も例にもれず、その内の一人である。人間は他の動物に対して、あまりにも利己的に振る舞い、冷酷かつ徹底的な搾取をしてきたと言えるが、それを我々が正当化できているのは、人間を最上の存在であらゆる動物の命に勝ると疑わない、その思い込みゆえになせる業なの

かもしれない。

一方では、その思い込み自体が案外不安定な土台の上に成り立っているのではないかとも考えられる。例えば、大切にしているペットと見ず知らずの他人が溺れ掛けていて、両者のうち一方しか助けられないと仮定する。人はどちらを選ぶだろうか。ペットを選ぶというのは想像に難くない答えである。個人レベルで考えれば、命の尊さは法律や社会が定めるように人が頂点であるとの前提に我々は生きていないとさえ言える。それならば、人間一人一人は、人間と動物という区分から離れ、愛情を注ぐ対象を広げることも可能はずである。また、自然に生かされている存在として謙虚な生き方をすることも、その人の心がけ次第で可能なことであろう。人間の権利、および、その命の価値は歴史上類を見ないほどに高められた一方、他の動物の命は相対的に軽んじられるようになっていった。だが、人間が一人では生きられないように、人間という種だけで生きていくことも無理であるから、人間社会が利己的に拡大するのは避けねばならない。もし、我々の愛情を積極的に自然や、他の動物に向けていくことができれば、その拡大する速度を少しでも減じさせる手段となり得るだろうし、我々個々人が地上に息づく者として利他的になるべき動機も増えていくだろう。しかし、私にはそれらを可能にするまともな方法は、都市部から離脱する、ということくらいしか思いつかない。

作家のヘンリー・ジェームズは当時人口400万人を誇ったニューヨークを見て、「ないない尽くし」との感想を述べた。全てが揃っていきそうな最先端の都市を何も無い土地と考えた彼の意見は、100年余り前の世論からほとんど黙殺されたが、彼が現代でこの意見を唱えたとしても結果は同じだっただろう。そんな人工的な豊かさを有り難がる多くの我々現代人は、もしかしたら、本来享受できなかったはずの豊かさをまるで経験できずに今を生きているのかもしれない。それは、あたかも「虚しいものを求め、自らもまた虚しい者となった」との格言を体現しているようなものである。人間は動物を徹底的に搾取し、利己的に繁栄したことで、生物界の厄介者となっただけでなく、かえって本質的に貧しい暮らしを強いられるようになっているのかもしれない。

(本学 文学部人文学科 講師)

同朋大学“いのちの教育”センター講座一覧

連続いのちの講座 **テーマ** “いのち”の教育

会場 Do プラザ 閲覧
無料

7/23(火) 16:30～18:00

個でありながら仏性 — 絶え間ない自己形成 —

講師 岩瀬真寿美 (本学 社会福祉学部 准教授)

9/24(火) 16:30～18:00

近代日本の「いのち」と「死」

講師 金山泰志 (本学 文学部 講師)

10/22(火) 16:30～18:00

真宗の教えを聞いたものが活動する理由

講師 田中智教 (名古屋別院社会事業部)

11/12(火) 16:00～17:00

絵本の音楽会 — 赤ちゃん社長とモチモチの木 —

講師 疇地希美 (本学 社会福祉学部 講師)

12/3(火) 16:30～18:00

仏弟子たちの仏教

講師 福田 琢 (本学 文学部 教授)

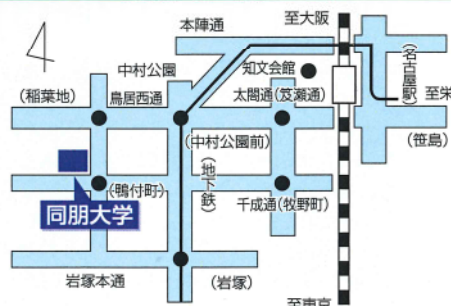
所 員

- センター主幹：安藤 弥 (文学部 教授)
 所 員：森村 森鳳(張偉) (文学部 教授)
 所 員：石牧 良浩 (社会福祉学部 准教授)
 所 員：岩瀬真寿美 (社会福祉学部 准教授)
 所 員：市野 智行 (文学部 専任講師)

お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター
 〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
 ☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス/米又は笹島より④系統稲西車庫行、鴨付町下車
 地下鉄/中村公園より⑬系統稲西車庫行、鴨付町下車